

〈資料〉

サッカーにおける攻撃の戦術について
—突破の選手, フォローの選手, バランスの選手の動きについて—

吉村 雅文*・野川 春夫**・久保田洋一*・末永 尚*

A Study on Tactics of Attack in Football Game
—Movement of 3 players—

Masafumi YOSHIMURA*, Haruo NOGAWA**, Yoichi KUBOTA* and Takashi SUENAGA*

Abstract

The purpose of this study was to make objective analysis about Tactics of attack of world level. The findings of this research are as follows.

- 1) Effective attacks were constituted after getting ball from the opponent around halfway.
- 2) Effective attacks were constituted by many passworks than dribbles.
- 3) Effective attacks were constituted by the cooperations of 3 or 4 players.
- 4) Many plays were found within the 8 grids from the point where the effective attack started.
- 5) Some players were seen to start running toward the attacking direction from the point where the effective attack started.

These results suggest important factors of basic Tactics.

I 緒 言

日本サッカー界は1990年代に入り、目覚ましい進歩を遂げた。特に1993年にプロリーグ「Jリーグ」が開幕、選手はもちろんサッカーに携わる人々により高いレベルの活動の場が身近に生まれたことは大きな要素であったと思われる。

そして、1997年には、FIFA ワールドカップ・フランス大会のアジア予選を突破、ついに世界の扉を開き、本大会出場を決めた。さらに、1999年には、FIFA ワールドユース選手権で準優勝、シドニーオリンピック出場権獲得、また、現在では数人の日本人プロ選手が海外で活躍するようにな

った。

しかし、さらなる進歩をめざし、世界のトップレベルを目指すためには、世界大会での結果を分析把握し問題点を明確にすることが重要である。

1998年 FIFA ワールドカップ・フランス大会において日本サッカーは、世界のトップレベルとの差、日本サッカーのレベルを肌で感じる事ができた。この貴重な経験は、今後の日本サッカー発展のために、活用しなければならない。そのためには、ワールドカップ・フランス大会を冷静にかつ正確に分析・検証する必要があった。そこで日本サッカー協会は、FIFA 技術委員会、アジアサッカー連盟の協力を得、FIFA ワールドカップ・フランス大会テクニカルレポートを作成した³⁾。

そこには、Jクラブはもちろん、日本代表および各年代の日本代表チーム、ユース年代のトレセン活動、日本サッカー協会に加盟登録する全ての

* サッカー研究室
Seminar of Soccer

** スポーツ国際比較研究室
Comparative Studies of International Sport for All

チームを対象として、将来に向けた強化案および強化策が示されている。

FIFA ワールドカップ・フランス大会では、上位進出を果たしたチームは、相手に時間とスペースを与えない、高度かつ、緻密に組織化されたチーム戦術を駆使し、相手からのプレッシャーがある中でも、その局面を打開するだけの、速くかつ、正確な技術と高い戦術眼、Physical Ability、と Fighting Spirits などを持ち合わせ、日本代表選手よりも優れていた。また、世界で戦うためには、高度に組織化されたチームの中にできる、一瞬の間を見逃さず、そこを突く能力（判断力の速さと正確性、キックなどの技術的要素の精度、フィジカルの強さと速さ）、ボールを持っていない局面でのプレーがより重要であると述べられている⁴⁾。そして、それらを改善するために将来に向け、クリエイティブなプレー、クリエイティブな選手の指導育成が急務であることが述べられている⁵⁾⁷⁾。

クリエイティブなプレーとは、創造性あふれるプレーであり、以下のような要素が必要と考えられている⁵⁾。

○ オフ・ザ・ボールの動き

ボールを持っていない時、周囲の状況を把握するために、よい身体の向きをとり、視野の確保をする。

○ 戦術的な理解

○ 判断の速さと柔軟性

ボールを受ける寸前まで、周囲の状況変化などを把握、プレーの選択肢を広げておく。

○ 基本的な技術

パス、ファーストタッチなどの精度

また、クリエイティブな選手とは、図1のように表すことができる⁶⁾。

以上のように、クリエイティブな選手を育て、クリエイティブなプレーを行うためには、戦術的な理解が必要不可欠であることは言うまでもない。

では、戦術的な理解とはどういうことなのだろうか。多和らは¹⁾、戦術とは、与えられた条件のもとで、チーム力を最大限に有効に発揮するために必要なもので、合理的かつ計画的なものである

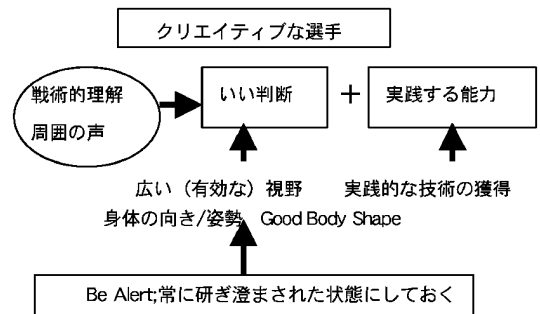


図1 クリエイティブな選手

と述べている。また、湯浅は²⁾、チームとしての攻め方、守り方の大きな方向性のことであり、戦い方のコンセプトというべきものと述べている。

そこで、本研究では、世界のトップレベルで戦うために重要な要素である、クリエイティブなプレーや選手に必要な戦術的な理解に焦点を当て、実際の世界のトップレベルチームがゲーム中の攻撃の中で、どのような戦術的な理解の上でプレーを行っているかの傾向を見つけ出し、今後、指導および競技力向上の一助となることを期待した。

II 研究方法

世界のトップレベルと言われる、欧州4ヵ国、イタリア、スペイン、オランダ、ポルトガルにおいて、2000年～2001年シーズンに行われた各国内1部リーグ5試合、合計20試合を対象にした。

対象にしたゲームは、全てSKY Perfect TVで放映されたものを録画し使用した。

分析に関しては、ビデオより、サッカー指導の専門科が1試合の中で最も有効な攻撃であったと思われるものを10通り選んだ。ここでの有効な攻撃の考え方は、ボールを取り返した後、一連のプレーの結果が、得点、シュート、センタリングに結びついた場合および、もうワンプレーが成功すれば、得点、シュート、センタリングに結びつく結果が予想される場合とした。

記録記入に関しては、24分割された1/370のサッカーコート図に、一通りずつ、ボールを奪取し

た地点からのボールの動きと種類, ボール保持者やボールの動きに対し, 関与しようとした選手の動きと位置, どのタイミングで動き出しているかを攻撃の起点として記入した.

記録記入に際しては, 競技場のラインや芝の刈り目を目印にできるだけ正確に記入した.

また, 記録記入に関しては, 以下のように行った.

ボールを奪取した位置 : S

選手 : ●

ボールの動き : 

選手の動き : 

ドリブル : 

攻撃の起点 : ★

Ⅲ 結果および考察

世界のトップレベルと言われる, 欧州4ヵ国, イタリア, スペイン, オランダ, ポルトガルにおいて, 2000年~2001年シーズンに行われた各国内1部リーグ5試合, 合計20試合を対象にサッカー指導の専門科が1試合の中で最も有効な攻撃であったと思われるものを10通り, 合計200通り選んだ. その一部は, 図2に示す通りである.

分析に関しては, 実際の世界のトップレベルチームがゲーム中の攻撃の中で, どのような戦術的な理解の上でプレーを行っているかの傾向を見つけ出すことが目的であるため, 一つ一つの有効な攻撃を考察するのではなく, 無作為に選ばれた有効な攻撃を10通りずつ重ね合わせ考察する方が, 共通の傾向が見つけ出しやすいのではないかと考えた.

図3-1, 図3-2は, 無作為に選ばれた10通りの有効な攻撃を重ね合わせてきた, 20の図の内の2つである.

無作為に選ばれた10通りの有効な攻撃を重ね合わせてきた, 20の図を分析した結果, 有効な攻撃の第一歩であるボール奪取の位置(S)が, 図3-1, 図3-2に代表し示されるように, サッカーコートの中グレイ部分に集中している結果が確認された.

さらに, 有効な攻撃を組み立てる課程を20の図ごとに分析した結果, ドリブルの回数は, 6~13回, パスの本数は, 28~39本の範囲であった. 図3-1の場合は, ドリブルの回数9回, パスの本数は33本, 図3-2の場合は, ドリブルの回数9回, パスの本数39本であった.

次に, 有効な攻撃の起点(★)から, 得点, シュートおよびボールを奪われるまでに関与した選手の人数を200通りから分析した. その結果, 有効な攻撃の起点から, 得点, シュートおよびボールを奪われるまでに2人の選手が関与していた場合は, 8通り, 全体の4%であった. 以下3人の場合は, 60通り, 全体の30%, 4人の場合は, 96通り, 全体の48%, 5人の場合は, 32通り, 全体の16%, 6人の場合は, 1通り, 全体の0.5%であった. 有効な攻撃の起点から, 得点, シュートおよびボールを奪われるまでに2人, 3人, 4人の選手が関与した代表的な例を図4に示した.

次に, 有効な攻撃の起点(★)を中心にした周辺関与選手の状況には, 共通の傾向があるかどうか分析するために, 前述した方法と同じように, 無作為に選ばれた有効な攻撃の起点★印を中心にし, 10通りずつ重ね合わせて分析を行った.

その結果, 図5-1, 図5-2に代表されるように起点★を中心にした部分を囲む8つのグリッド内(図5-1, 図5-2グレイ部分)で, 多くの選手(●印)が関与している状況が確認できた. さらに, 有効な攻撃の起点を中心にした部分からやその周辺から攻撃方向に多くの選手が動き出す傾向が確認できた.

以上の結果より, 現代のプレッシングサッカーの中で, 有効な攻撃をするためには, 相手に時間とスペースを与えず, いかに早くボールを奪取し, いかに早く得点に結び付ける攻撃をするかが世界のトップレベルに必要な戦術的要素であることを示唆していると考えられる. 世界最高峰の大会であるワールドカップのデータにおいても, 攻撃におけるパス数2~4本が全体の46.6%という報告がなされているように⁶⁾, いかに早く手数をかけず攻めるかが世界レベルでの大きな課題であり, 選手が十分に理解しなければならないことで

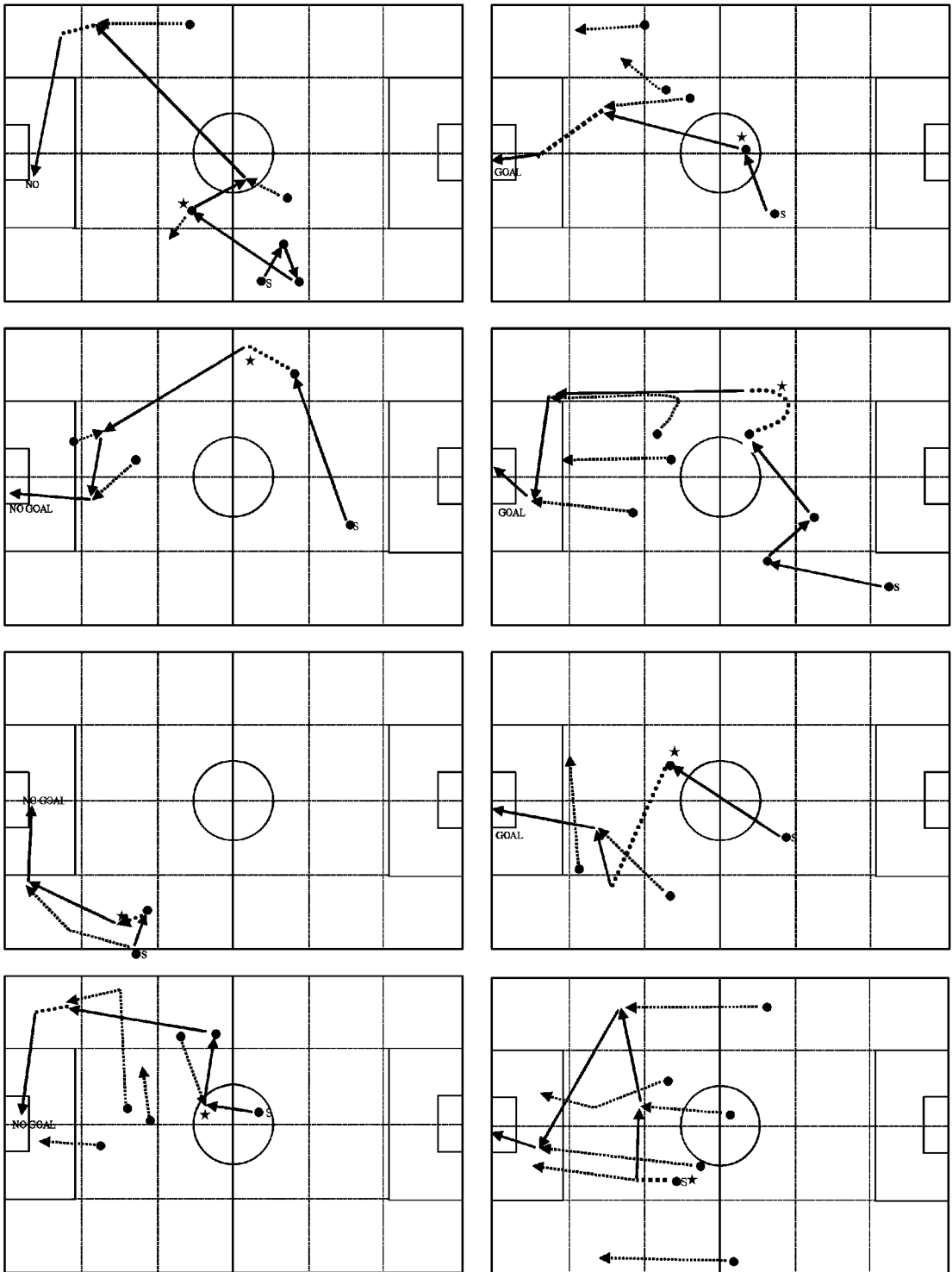


図2 有効な攻撃8例(他192)

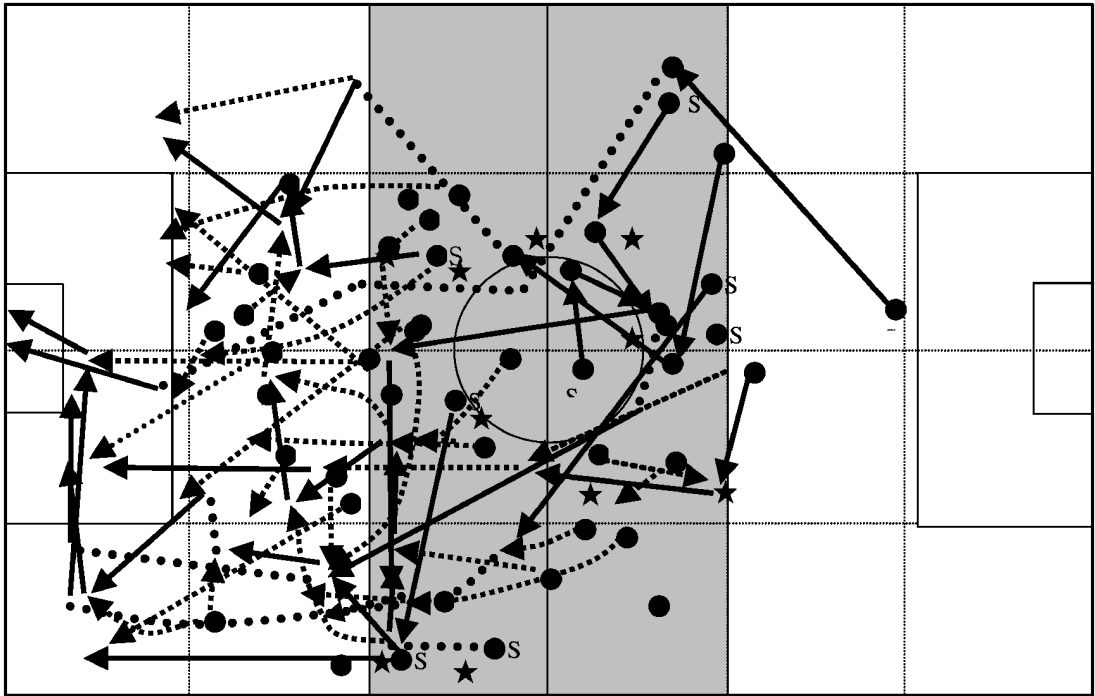


図3-1 攻守が切り替わった地点Sからの有効な攻撃（10例）

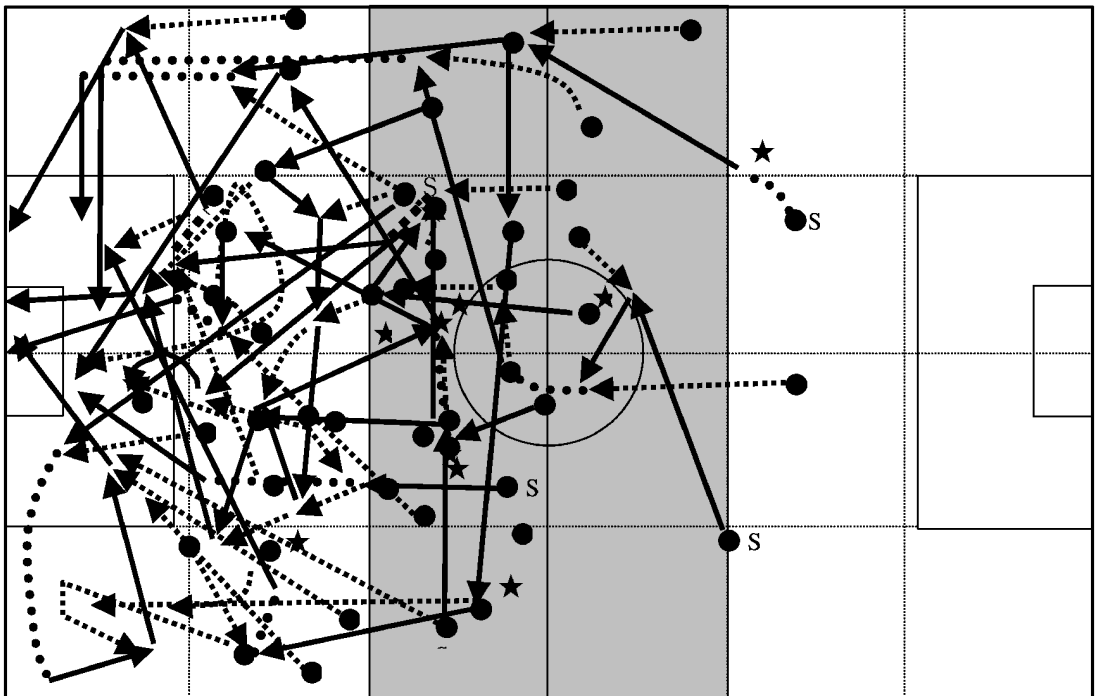


図3-2 攻守が切り替わった地点Sからの有効な攻撃（10例）

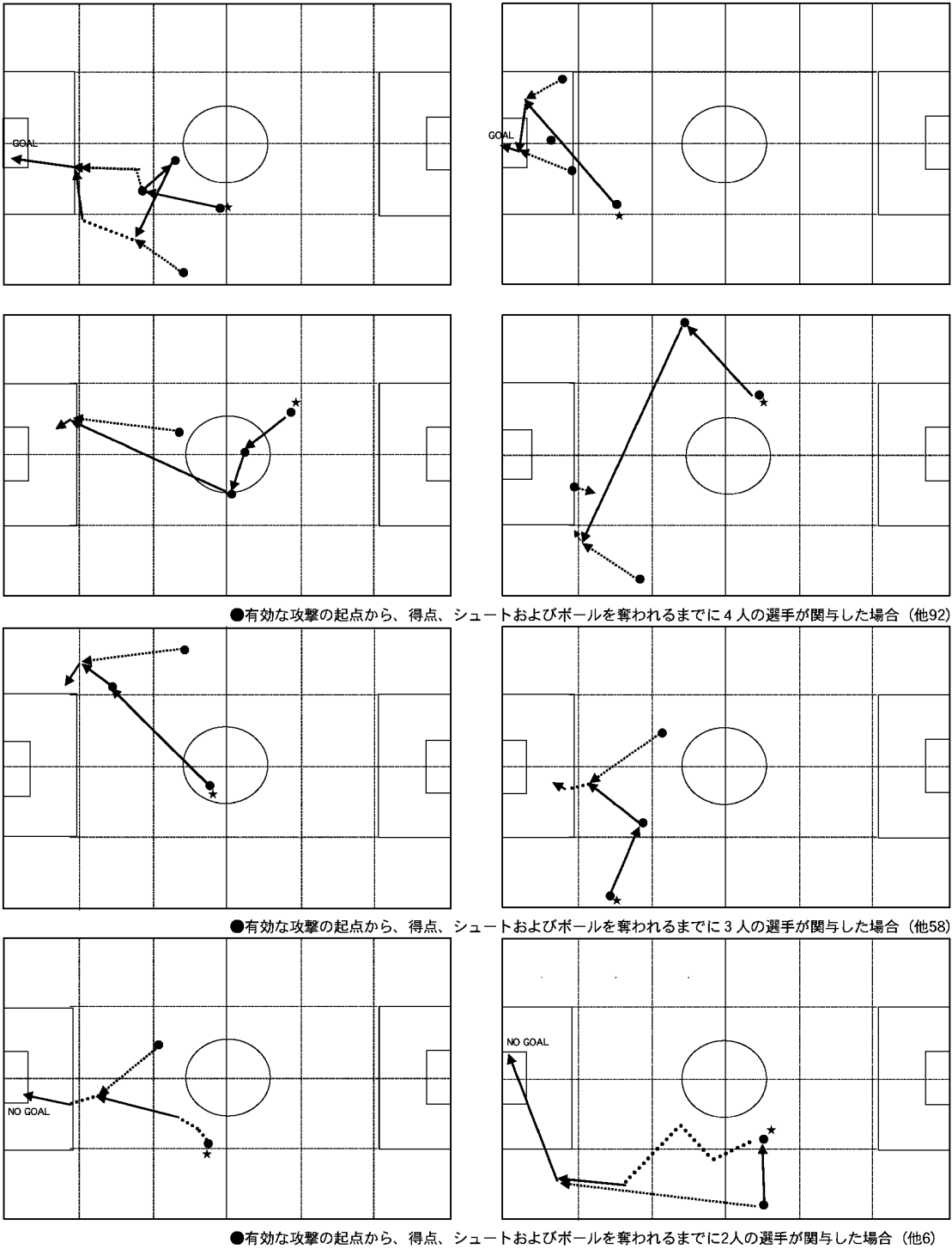


図4 有効な攻撃の起点★から、得点、シュートおよびボールを奪われるまでに関与した選手数

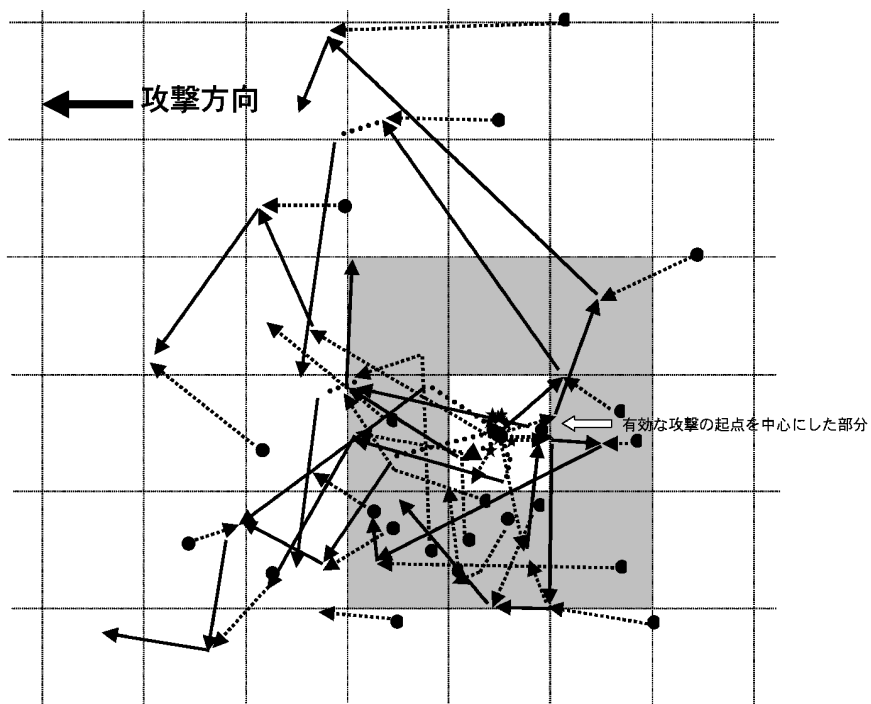


図 5-1 有効な攻撃の起点を中心にした時の周辺関与選手の状況

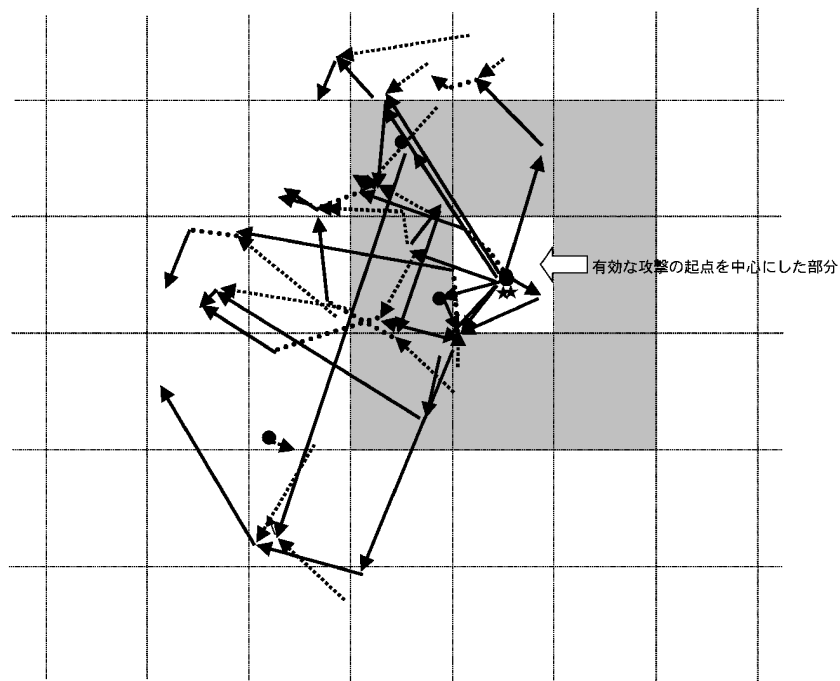


図 5-2 有効な攻撃の起点を中心にした時の周辺関与選手の状況

あると思われる。そして、いかに早く手数をかけずに攻撃するための戦術的要素は、3~4人がボールに関与すること、周辺選手の動き出しは攻撃の起点となる周辺であり、起点から離れ過ぎず、近すぎない距離で、なおかつ攻撃の方向であることが重要であることを示唆しているのではないだろうか。1~2人では、相手ディフェンダーにすぐに攻撃の意図を見破られてしまう。しかし、3~4人だと相手ディフェンダーを攪乱でき、さらに、ボール保持者もパスをする選択肢が増え、有効な攻撃の可能性を増やし効果的であることを示唆しているのではないだろうか。

IV まとめ

世界のトップレベルの有効な攻撃を200通り分析した本研究において、世界のトップレベルのチームの有効な攻撃に存在する共通の戦術傾向が示唆された。

1. 有効な攻撃は、ハーフウェイライン近辺でのボール奪取からスタートしている傾向が示唆された。
2. 有効な攻撃の課程は、ドリブルが少なく、パスを多用している傾向が示唆された。
3. 有効な攻撃は、攻撃の起点となる位置から、3人、4人の選手の関与で構成されている傾向が示唆された。
4. 有効な攻撃では、起点となる部分を囲む8つのグリッド内で多くの選手が関与している傾向が示唆された。
5. 有効な攻撃は、攻撃の起点を中心にした部分からやその周辺から、多くの選手が攻撃方向に動き出す傾向が示唆された。

以上より、世界のトップレベルの有効な攻撃に存在する戦術的な理解および要素とは、以下の項目を含んでいると考えられる。

- ・ハーフウェイライン近辺でボールを奪う。
- ・パスを多用する。
- ・ボール保持選手に、3人関与する。
- ・ボール保持者から遠すぎず近すぎない距離でパスを受けることのできる選手をつくる。(フォローの選手とバランスの選手)
- ・ボール保持選手から、攻撃方向に動き出す選手を作る。(突破の選手)

参考・引用文献

- 1) 多和健雄, 長沼健, 長嶋正俊: サッカーのコーチング, 71, 大修館書店, (1991)
- 2) 湯浅健二: 闘うサッカー理論, 146, 三交社, (1995)
- 3) 財団法人サッカー協会: FIFA ワールドカップフランス98テクニカルレポート, (1999)
- 4) 財団法人サッカー協会: FIFA ワールドカップフランス98テクニカルレポート, 4, (1999)
- 5) 財団法人サッカー協会: FIFA ワールドカップフランス98テクニカルレポート, 55, (1999)
- 6) 財団法人サッカー協会: FIFA ワールドカップフランス98テクニカルレポート, 63, (1999)
- 7) 財団法人サッカー協会: 強化指導指針2000年版ポスト2002, 56, (2000)

(平成13年12月6日 受付)
(平成14年2月26日 受理)